令和3年度　学校評価

伊予市立中山小学校　　令和4年2月

【評価基準】　A：目標を達成(80%以上)　B：おおむね達成(60%以上)　C：あまり達成できていない(60%未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
仲間を大切にする子　徳	○心のつながりを深め、共に伸びる仲間をつくる人権・同和教育の充実	○豊かな関わりを育む異年齢集団活動が充実している。 【目標値】 ○異年齢集団活動を実施可能な時間数(月２回)に対して9割以上実施 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○縦割り班活動では、縦割り班遊びや清掃、運動会などを行っている。縦割り班遊びでは、新型コロナウイルス感染症の影響により回数は制限される中、機会を見付けて、できるだけ活動することができた。高学年を中心に遊びの計画をし、学年の枠を越えて、仲よく遊ぶ姿が見られる。また、運動会では、同じ目標に向かって努力する姿や、低学年が高学年を応援したり、高学年が低学年を優しく気遣ったりする姿が見られた。異学年と交流することで、豊かな心情が育まれている。	教職員アンケート	A	60	40	0	0
					保護者アンケート	A	41	57	2	0
					児童アンケート	A	71	29	0	0
					異年齢集団活動(2学期)	合計　3　回				
		○友達に対して、思いやりのある言動がとれている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○今年度、人権・同和教育の研究発表校として道徳科、学級活動、社会科、生活科等、様々な教科の実践で相手を思いやる心情の育成を図り、相手に対する言葉遣い等への意識や態度の変容が見られた。 ○階段の踊場に紙で作った「スマイルの木」を掲示し友達のよいところを葉の形の紙に書き、その木に貼り付けてどんどん木を大きくしている。友達からの温かいメッセージを見て、次は自分が友達のよいところを見付けて書こうとしており、集団の一員であることの喜びや相手を思いやる気持ちが高まる一助となっている。 ●上記の活動は、コロナ禍で様々な交流活動の制限や中止等が余儀なくされたが、コロナの状況の改善を見ながら交流活動の充実を通じても、こうした心を育てていきたい。	教職員アンケート	A	20	80	0	0
					保護者アンケート	A	23	73	4	0
					児童アンケート	A	31	69	0	0
	学校関係者評価委員の所見	○昨年度に引き続き、コロナ禍で、感染対策を優先していることから、交流活動を行うことができにくいようだが、児童の100%が肯定的に捉えており、異学年での縦割り交流活動を楽しみにしているのは、うれしいことです。 ○公民館の少年教室レクスポーツにおいて、6年生が中心となってチームに働き掛け、活動をスムーズに進めることができていた。こうしたよい伝統を下級生が受け継いでいってほしい。		学校の対応	○3学期は感染対策を最優先したことから、縦割り班遊びや縦割り清掃を制限することとなった。子どもたちは関わること自体に楽しさを感じているため、交流の場を保証していかなければならない。 ○コロナ禍においても、異年齢集団での縦割り班活動をいかにすれば持続させることができるかを教職員で考えるとともに、よりよい関わりを通して、互いの存在を大切にする仲間づくり、いじめに負けない仲間づくりを目指していきたい。					

【評価基準】　A：目標を達成(80％以上)　B：おおむね達成(60％以上)　C：あまり達成できていない(60％未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
仲間を大切にする子　徳	○生命の大切さを自覚する道徳教育の推進	○命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○昨年度に引き続き、「命は一つ」の合い言葉をもとに、教職員が共通理解を図り指導することができている。 ○豊かな自然に囲まれ、児童が自然と親しむ機会は多い。理科や生活科の学習などにおいても、昆虫の飼育を行い生き物を大事に世話することができた児童も多い。 ●学期末ごとに、生命の大切さを自覚することができるように道徳科や生活場面での振り返りを実施することで、児童に命についての意識付けができ自己評価が高まると思われる。 ●一人一鉢の花の栽培について、花の世話を児童に呼び掛けるようにしたい。	教職員アンケート	A	80	20	0	0
					保護者アンケート	A	25	73	2	0
					児童アンケート	A	46	48	4	2
		○いじめの早期発見・早期対応・未然防止に努めている。 【目標値】 ○教職員・保護者の8割以上が肯定	A	○人権・同和教育の研究校として「いじめ」は人権問題であることの共通理解を図った。また、教職員研修により、さらにいじめに対する認識が深まり、より迅速で適切な対応が進められた。 ○日常の観察に加え、毎月の「心の健康調べ」、職員会や研修、教育相談員との情報交換等で常に児童の状況を確認し、早期発見・対応、未然防止が進められた。 ○児童集会で「ことば」の見直しをしたり、人権・同和教育参観日に愛媛県教育委員会が実施した「いじめSTOPデイ」の取組に参加したりして、親子でいじめに対する意識が高まった。 ●こうした取組の継続が課題である。	教職員アンケート	A	80	20	0	0
					保護者アンケート	A	25	69	6	0
					いじめ・不登校状況	いじめ・不登校　0件				
	○一人一人の可能性を伸ばす特別支援教育の充実	○児童一人一人の実態を把握し、個に応じた指導を行っている。 【目標値】 ○教職員・保護者の8割以上が肯定	A	○職員会等で、児童の実態や、配慮が必要な児童についての共通理解を図っている。伊予市特別支援教育巡回相談員(谷村先生)や、教育相談員(仲神先生)のアドバイスを受けながら、個に応じた指導に生かしている。児童の安全確保のために学校生活支援員を配置し、合理的配慮を行っている。 ●来年度より複式学級ができるので、よりきめ細やかな配慮が必要となってくる。	教職員アンケート	A	70	30	0	0
					保護者アンケート	A	29	71	0	0
	学校関係者評価委員の所見	○人権・同和教育の参観日に参加することができ、学校の取組を知ることができた。授業の中で、先生と子どもたちが共に命の尊さや互いを大切にすることについて落ち着いた雰囲気で学んでいるのがよい。 ○子ども同士の関わりにおいて、いじめの早期発見、早期対応、未然防止に努めている学校の取組が分かった。 ●いじめ問題等は、直接同和問題に関係ないのではないか。学校での取組も大切だが、家庭の問題が影響しているのではないかと思う。大人の言葉を振り返り、家庭での会話を大切にするとよいのではないか。		学校の対応	○新型コロナウイルス感染状況が落ち着いていた時で、保護者や地域の方に人権・同和教育参観日をご案内することができよかった。 ○今年度、県の人権・同和教育訪問に向けて、取組を見直したり強化したりした。単年の取組で終わらせることなく、持続的な取組となるよう各学年の実践をしっかり引き継いでいきたい。 ○子どもたちに「命は一つ」の合い言葉がしっかりと根付いている。言葉だけで終わることなく、自他の命や存在を守る仲間づくりや安全教育に取り組んでいく。 ○心の健康調べやチャンス相談などを生かし、些細なことに対しても即時対応、即時解決に努め、生徒指導主事を中心にチームでいじめの芽を摘み取っていきたい。						

【評価基準】　A：目標を達成(80％以上)　B：おおむね達成(60％以上)　C：あまり達成できていない(60％未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
考え　表現する子　知	○確かで豊かな言葉の力を身に付ける指導の工夫	○自分の思いを相手にはっきりと伝えることができている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	B	○校内での国語科研究推進の中で、対話活動に重点を置いている。話合いの目的を明確化したり、自分の意見をしっかり持って話せるよう時間の確保を行ったり、伝えた自分の思いや考えを可視化して振り返ることができるよう努めたりしている。また、各教室に伝え方の話形を掲示し、語尾まではっきりと伝えきるよう指導している。 ●少人数の環境下では、互いの理解が深まりやすい一方で、伝える必要性を感じにくくなりがちなので、しっかりと伝える重要性を認識させていきたい。	教職員アンケート	B	0	70	20	10
					保護者アンケート	B	10	59	29	2
					児童アンケート	B	21	52	23	4
	○少人数を生かした学習指導の工夫と基礎・基本の徹底	○児童には、発達段階に応じた基礎的な学力が身に付いている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定 ○漢字・計算検定で9割以上の児童が合格(合格90点) ○自主学習ノートの活用回数(低：週3回以上、中週4回以上、高6回以上)	A	○年度始めに学び方について、教職員間で意識統一を図った上で、家庭にも学習の手引きを配付することができた。 ○漢字・計算検定とも、目標値を上回っており、目標を達成することができた。わずかではあるが、漢字・計算検定ともに昨年度の平均を上回っている。 ○自主学習ノートの活用回数について、昨年度より、12％上がっており、自主学習の習慣が付いてきている。 ●少数ではあるが、あまり達成できていないと答えている。保護者や児童の何人かは、基礎的な学力が身に付いていないと感じている。全国学力テストの結果や傾向を踏まえて今後も、児童への学力の保障をするための手立てを考える必要がある。	教職員アンケート	A	13	75	13	0
					保護者アンケート	A	25	58	15	2
					児童アンケート	A	56	38	4	2
					漢字検定	A	90点以上 学年平均97％			
					計算検定	A	90点以上 学年平均93％			
					自主学習ノート	A	学年平均93％			
		○家庭での学習にしっかり取り組んでいる。 【目標値】 ○家庭学習時間(低30分、4年以上は学年×10分以上) ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○わずかではあるが、昨年度と比べ保護者アンケートの結果が上がり、評価がBからAになった。家庭で児童が学習する時間が増加している。学年始めに、自主学習ノートの例や学習のヒントを配付したり、教職員の指導の成果が現れてきているようだ。 ●タブレットも毎日持ち帰るようになったので、家庭でもデジタルドリル学習に取り組んでいる児童もいる。来年度は、タブレットを使っての家庭学習も工夫していきたい。 ●学習内容の充実を図るために、来年度は自主学習ノートの展示をしたり、学習例を提示したりして工夫改善していきたい。	家庭学習時間	A	学年平均82％			
					保護者アンケート	A	18	62	18	2
					児童アンケート	A	92			8
	○主体的・対話的で深い学びに向かう授業の充実	○教師一人一人が「主体的・対話的で深い学びに向かう」授業づくりに努めている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○昨年度に引き続き、本年度も、特に国語科を通して「主体的、対話的で深い学び」に向かうための授業改善に取り組んでいる。校内で授業研究を行い、全教職員参加で研究協議をした。講師の先生からも指導助言をいただいて、日々の授業づくりに生かしている。また、対話活動に生かせる思考ツールの活用を図ったり、深い学びにつながる「学んだことを生かす」教育活動を年間指導計画に位置付け、実践したりしている。今後も引き続き、授業力の向上に努めたい。 ●3学期は、感染症対策のため、教育活動に大きな制限があった。そのような場合でも、タブレット等を有効活用し、よりよい授業づくりの推進が停滞しないよう工夫していきたい。	教職員アンケート	A	11	78	11	0
					保護者アンケート	A	33	67	0	0
					児童アンケート	A	90			10

学校関係者評価委員の所見	○年度初めに教職員間で学び方について共通理解を図り、「学習の手引き」を全家庭に配付し、家庭にも啓発、協力を得る取組はとても大切である。今後も続けてほしい。 ○子ども一人一人に発達段階に応じた基礎的な学力が身に付いていることが見て取れる。教員一人一人が主体的、対話的で深い学びに向けての授業づくり、タブレット活用など、増える一方で大変だが、頑張っていただきたい。 ○公民館行事の少年教室において、自分の言葉で相手に伝わるように発表することができていた。普段から学校などで、表現力を身に付けていると思った。	学校の対応	○今後も少人数を本校の強みと捉え、個に応じた指導に努め、基礎基本の定着を図っていきたい。 ○一人1台タブレットが使えるようになり、3学期から持ち帰りを行っている。Eライブラリ等、個に応じた効果的な活用や教員のスキルアップにチームとして取り組みたい。 ○家庭学習について、昨年度よりポイントアップした。習慣化の取組はもちろんであるが、家庭学習等における内容の質的向上を図っていきたい。 ●国語科を中心として、表現力の向上に努めているが、新型コロナ感染症対策によって、ペアやグループによる対話活動を年間を通した取組として充実させることができなかった。自己対話等、できることの中で、思考に効果的に働き掛け、表現力等を高めていきたい。

【評価基準】　A:目標を達成(80%以上)　B:おおむね達成(60%以上)　C:あまり達成できていない(60%未満)

項目	小項目 (重点目標)	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
やる気で頑張る子 体	○家庭と連携したコロナウィルス感染症対策	○家庭と連携して感染症対策を徹底する。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定	A	○毎朝の健康観察や不織布マスクの着用等、家庭の協力を得て、感染症対策を行うことができている。日々の感染症対策のおかげで新型コロナウイルス感染症に限らず、その他の感染症についても流行することなく児童は元気に過ごすことができている。 ●オミクロン株の感染が急拡大しており、飛沫感染だけでなく、接触感染を防止する必要がある。手洗い・うがい・手指消毒を学校や家庭で更に徹底して行うよう、児童に声掛けをしていきたい。	教職員アンケート	A	50	50	0	0
					保護者アンケート	A	41	57	0	2
					児童アンケート	B	23	56	19	2
		○健康管理に努め、毎日元気に生活している。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定 ○欠席0の日が年間80日以上	A	○感染症対策が身に付いてきており、児童一人一人の健康管理の力がついてきていると思う。欠席0の日も目標に到達しており、元気に登校する姿がみられる。 ●毎月の生活リズム調べでは、就寝時刻が遅い児童が何人かおり、朝の登校が遅れたり、授業中に眠たそうにする姿もみられる。生活リズム調べを用いた個別指導やほけんだよりの活用などで、生活リズムの改善を図っていきたい。 ●コロナ禍で、異学年の交流や外での遊び・活動が制限されており、ストレスを感じている児童もいるように思う。感染症対策は徹底しつつ、児童が楽しいと思える学校生活を送ることができるよう、家庭とも連携して支援していきたい。	教職員アンケート	A	40	60	0	0
					保護者アンケート	A	25	57	14	4
					児童アンケート	B	42	31	25	2
					欠席0の日	98日(2/2現在)				
		○食生活に気を付けて生活している。 【目標値】 ○保護者・児童の8割以上が肯定	B	○今年度も感染症対策のため、給食時間における栄養教諭の給食指導を行うことができなかったが、6年生の家庭科の授業では、栄養教諭による授業を行い、食に関心を持たせることができた。 ●ほとんどの児童は朝ごはんを毎日食べてきているが、中には朝ごはんを食べずに登校する児童がいるので、毎月の生活リズム調べを継続して実態を把握するとともに、感染状況に応じて栄養教諭による指導も取り入れていきたい。	保護者アンケート	B	18	60	20	2
					児童アンケート	B	46	31	17	6

学校関係者評価委員の所見	○新型コロナウイルス感染症対策を中心として健康管理に努め、子どもたちが毎日元気に生活しているようで、家庭と学校の連携ができていると思う。 ○新型コロナウイルス感染症対策としてマスクを着用しての運動は大変だと思う。	学校の対応	○各学級に空気清浄機を設置するとともに、給食は黙食、授業はアクリル板で囲いをして飛沫が飛ばないようにしている。また、常時換気を行い、感染対策を徹底している。さらに、3学期には教育活動の一部や交流活動を制限した。 ○三密をはじめとした感染対策は命を守る一つの方法として子どもたちの学校生活において、定着した。いつでもどこでも誰でも感染するかもしれないとの考えのもと、感染症対策を続けていきたい。 ●子どもの生活習慣は、本人の意欲と家庭の協力がなければ改善することができない。そのため、学校では、学力と基本的な生活習慣の関連について子どもの変容を促したり、保護者の協力を得られるようにしたりして、啓発活動の継続に努めたい。

【評価基準】　A：目標を達成(80%以上)　B：おおむね達成(60%以上)　C：あまり達成できていない(60%未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
やる気で頑張る子　体	○元気な挨拶・返事・履物の整頓等生活習慣の定着	○進んで元気な挨拶ができる児童が育っている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童・地域の8割以上が肯定	A	○友達との距離を取ることや、大声で話さない指導が求められているコロナ禍での「挨拶」への取組は、声が小さくなるのは仕方がない面があった。しかし、挨拶は、コミュニケーションを取る上で必要であり、相手の存在を肯定的に認める行為として大切であるので、挨拶の声の大きさに力点を置くのではなく、会釈等相手に交流や敬意の気持ちが伝わる動きを推進して、会釈の実践を進めることができた。 ○コロナの感染状況が大変でない期間は運営・健康委員会の児童が外に立っての挨拶運動や、朝来た児童から他の学年や職員室に行っての挨拶をして回ることも実施することができ、気持ちのよい交流がなされた。 ●挨拶の推進は家庭や地域との連携が必要で、たよりや交流の機会を捉えて挨拶推進の足並みをそろえたり、意識を高めたりする必要がある。	教職員アンケート	A	11	78	11	0
					保護者アンケート	B	12	55	31	2
					児童アンケート	A	50	44	6	0
					地域アンケート	A	50	46	4	0
	○様々な体力つくり活動の日常化による個に応じた体力の向上	○発達段階に応じた体力が付いている。 【目標値】 ○教職員・保護者・児童の8割以上が肯定 ○令和2年度新体力テストの課題である「立ち幅跳び」の記録が1学期より2学期で上回る児童の割合が8割以上	A	○新体力テストの立ち幅跳びにおいて、1学期よりも記録を向上させた児童が全体の8割以上だった。体育科の授業やITスタジアムの積極的・継続的な参加を通して、運動の楽しさを感じ、意欲が向上したことが、体力の向上にもつながったと考える。新型コロナウイルス感染症の影響により、活動に制限がある中であるが、今後も発達段階に応じた体力が身に付くように、体育の授業を中心として外遊びの励行なども行っていきたい。	教職員アンケート	A	20	80	0	0
					保護者アンケート	A	37	51	12	0
					児童アンケート	A	63	33	4	0
	学校関係者評価委員の所見	○挨拶については、できる子どもとそうでない子どもに分かれている。 ○近所の子どもたちに会うといつも元気な挨拶をしてくれうれしく思う。学童などで地域事務所に来る子どもたちは元気のよい挨拶ができ、気持ちがよい。 ○コロナ禍において、大きな声を出して挨拶することができないため、会釈の指導を行っているようで、相手に敬意を表す動作も身に付けさせたいですね。		学校の対応	○挨拶については、大きな声での発声に制限があったため、学校における挨拶運動を中止したが、声を出さなくても相手に敬意を表す会釈指導に努めた。 ●挨拶をしても返さない子どもがいるとの声があった。個人差が大きいが、挨拶は、基本的な生活習慣として、身に付けなければならないものであり、学校の課題として継続指導していく。 ○体力についても、体育や外遊びに制限がある中、課題であった跳力の向上が見られた。また、個の運動に限られていたが、そのおかげで縄跳びの技能や持続力の向上につながった。					

【評価基準】　A：目標を達成(80％以上)　B：おおむね達成(60％以上)　C：あまり達成できていない(60％未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
学び続ける子　知徳体	○夢と希望を持ち、最後までやり抜く心の育成	○夢と希望を持ち、最後までやり抜く心が育っている。 【目標値】 ○保護者・教職員・児童の8割以上が肯定	A	○保護者・教職員・児童の8割以上が肯定的に評価しており、目標を達成することができた。今年度は、「命は一つ」に加えて、「夢・きら」という合い言葉を掲げ、夢や目標を持って何事にも取り組もうとする意識が高まり、よい効果を上げている。コロナ禍の中ではあるが、運動会や校内持久走大会等の行事も工夫して実施することができ、児童が行事を通して成長を遂げることができた。少人数のため、どの子にも役割や出番があり、活躍の場が保証されているのもよかった。 ○次年度も今年度同様に全教職員が児童に目標を持たせ、最後まで見届けるという意識を持って指導に当たるようにしていきたい。	教職員アンケート	A	0	80	20	0
					保護者アンケート	A	10	80	10	0
					児童アンケート	A	54	40	4	2
	○家庭と協働した学習習慣の定着と読書習慣の形成	○豊かな心と言葉を育む読書活動の推進がなされている。 【目標値】 ○保護者・教職員・児童の8割以上が肯定 ○読み聞かせ等の読書指導を月3回以上 ○児童の読書量が1か月8冊以上	B	○各学年で図書室を利用する時間を確保したことで、児童の読書量は目標値を達成することができた。コロナ禍で読書ボランティアは未実施であが、教員、図書委員会等の読み聞かせ、月間おすすめ本の配布、「読書祭り集会」等を行い、読書意欲を高める活動を行った。 ●子ども新聞の有効活用と、児童が様々な分野に目を向けることができるよう、図書室での掲示が終わった新聞を各学級に配付するポスト活動を3学期から実施している。新聞で読んだ記事を朝の会で紹介する場を設けるなどして読む習慣を身に付ける工夫を考えていきたい。 ●100冊達成者の表彰がマンネリ化しているので、月間多読賞の掲示に転換したり、国語科の「読書紹介」単元の、発表・掲示の場として図書館を利用することで、意欲的な学習への取り組み、図書室利用の活性化、児童の読書の幅を広げることへとつなげたい。	教職員アンケート	A	43	57	0	0
					保護者アンケート	C	10	41	37	12
					児童アンケート	A	31	54	15	0
					読書指導の回数	B	2.4			
					1学期からの読書通帳	A	月平均 12.0冊(下学年) 12.3冊(上学年)			
	学校関係者評価委員の所見	○月間多読賞の掲示、国語科の「読書紹介」単元における子どもたちの取組の発表や掲示の場として、図書室を利用しているなど、子どもたちがより読書に親しめるよう工夫されていてよい。 ●読書活動に対する保護者の評価がCとなっている。学校での取組を家庭に発信して知らせる必要があるのではないか。		学校の対応	○子どもたちは、外遊びを好み、時間さえあれば運動場に出て体を動かし遊びに浸っているため、図書室を利用する子どもが少ない。そのため、学級ごとに図書室利用の時間を設け、図書の貸出し、家庭への持ち帰りを促した。 ○家庭学習調べ週間において、読書のチェック項目を設け、家庭での読書を促進した。 ●今後は、ノーテレビノーゲームや親子読書を勧め、家庭での読書を増やすよう手立てを講じていきたい。					

【評価基準】　A：目標を達成(80%以上)　B：おおむね達成(60%以上)　C：あまり達成できていない(60%未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
学び続ける子　知徳体	○郷土を愛する心を育む地域に根ざした学習活動の充実	○地域の人・自然・文化を生かした教育活動の展開がなされている。 【目標値】 ○教職員・保護者・地域の8割以上が肯定 ○地域体験活動を各学年学期に1回以上実施	A	○低学年から高学年まで、主に、生活科、社会科、総合的な学習の時間等の活動の中で、地域の様々な場所に実際に出かけて学習したり、地域の方に来校していただき、温かいふれあいの中、児童に直接ご指導いただいたりすることができた。このような豊かな人間関係の中で行われる体験活動は、児童の知的好奇心を刺激するとともに、ふるさとへの理解や愛着を深めるために重要である。地域の方のご協力に感謝し、今後も児童が充実した学びを得られるよう、教育活動の工夫を行っていきたい。 ●感染症の広がりの状況によって、例年の活動が、制限を余儀なくされる場合がある。様々な状況に柔軟に対応し、工夫して、地域とのつながりを大切にした活動が継続して行えるよう、努めていきたい。	教職員アンケート	A	11	78	11	0
					保護者アンケート	A	35	61	4	0
					地域アンケート	A	42	54	4	0
					地域体験活動	B	学年平均0.6回			
		○学校便り、学年通信、ホームページ等で学校の情報を積極的に発信している。 【目標値】 ○教職員・保護者・地域の8割以上が肯定 ○毎月1回以上学校・学級便り配付、HP更新	A	○教職員・保護者・地域の3者において、90%以上の方が肯定的な意見で、目標を達成している。毎月の学校だより「はぐくみ」等によって、子どもたちの姿や頑張り、学校の様子がよく分かるとのご意見をいただいており、今後も少人数のよさを生かして、子どもたちの様子を中心に詳しく伝えられるよう努めたい。 ○ホームページは、校長・情報教育主任を中心に学校での子どもたちの学びの様子を発信したり、新型コロナウイルス感染症に関する情報をお知らせしたりしている。今後も、迅速で分かりやすい情報発信に取り組んでいきたい。 ●毎日ホームページを閲覧されている保護者もいらっしゃるようで、学校の様子を知るためのツールとして毎日更新を望まれており、期待も大きいようだ。今後も、新型コロナ感染症に関する情報を含めて、タイムリーで正確かつ分かりやすい情報発信に取り組んでいきたい。	教職員アンケート	A	43	57	0	0
					保護者アンケート	A	35	57	4	4
					地域アンケート	A	73	27	0	0
					学校便り	月　1回				
					学年便り	月　0.7回				
					HP更新	月　20回				
	学校関係者評価委員の所見	○今年度もコロナ禍で、実際に地域の様々な場所に出かけ、地域の人から学ぶことが難しい状況であったが、生活科や社会科、総合的な学習の時間における学びについては、子どもたちにとって大切な学びであるため、できることを続けてほしい。 ○地域行事自体が実施することが難しい状況が続いているが、「どんど焼き」では、学校の協力を得ることができ、大変ありがたかった。教頭先生が、最後まで後片付けを手伝ってくれ大変助かった。 ○中山小学校卒業50周年の集まりは、卒業式に参加することができないため、今年もコロナ禍で中断している。再開できるようになったら実施してほしい。 ○コロナ禍において、学校行事への参加について慎重にならないといけない中、学校の様子が伝わりにくくなった。そのため、毎月の学校だよりを楽しみにしている。		学校の対応	○コロナ禍によって、今年度も交流や体験活動などの学習の実施が難しい状況であった。来年度も同じような状況を想定し、何ができ、そして、実施するためにはどんな工夫が必要か、これまでの経験を活かし、コロナ禍における持続可能な教育活動を行っていきたい。 ●新型コロナウイルス感染症対策のため、地域の方を学校に招く機会が少なくなり、学校から遠のいてしまったと感じられている。今はできなくても地域とのつながりは保っていけるよう工夫していく必要がある。 ○地域の方にとっては、学校だよりが学校の様子をつかむよりどころとなっている。今後も、学校の様子が詳しく伝わるよう、学校だよりの内容を工夫したり、ホームページをこまめに更新したりするなど、正確で分かりやすい情報発信に努めていきたい。					

【評価基準】　A：目標を達成(80％以上)　B：おおむね達成(60％以上)　C：あまり達成できていない(60％未満)

項目	小項目 （重点目標）	評価指標及び目標値	評定	学校による考察・改善方策	評価資料	評価	アンケート結果			
							4	3	2	1
業務改善	○教育の質の向上と教職員の負担軽減に向けた取組み	○教職員は子どもと向き合う時間に集中できている。 【目標値】 ○教職員の8割以上が肯定	A	○100%が肯定的な意見で目標を達成している。学級担任が学級の子どもに向き合えるよう、管理職・専科・養護教諭・生活支援員が協力体制を整えているので、配慮を要する児童や生徒指導上の課題に適切で迅速な対応をすることができた。 ○少人数のよさを生かし、休み時間等に個別指導を行うなど、学力の定着に努めることができた。	教職員アンケート	A	50	50	0	0
		○巡回教育相談員、ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ等専門人材の活用と連携がなされている。 【目標値】 ○教職員の8割以上が肯定		○100%が肯定的な意見で目標を達成している。相談員等の外部指導者との連携がよくとれている。児童についての情報を共有し、共に見守ることができている。 ○学級担任からも相談員等へ指導方法や関わり方について積極的に相談することで、児童一人一人に合ったよりよい指導に生かすことができた。	教職員アンケート	A	80	20	0	0
		○教職員は自身の専門性が高まる研修に取り組んでいる。 【目標値】 ○教職員の8割以上が肯定		○県の人権・同和教育訪問の指定を受け、研修主任や人権・同和教育主任のリードのもと、様々な人権課題について理解を深め、授業実践を行うことができた。 ○ICT支援員と連携しながら、授業の中でタブレットを活用することができてきた。支援員の協力のもと、教員自身のICT活用スキルを向上させていきたい。 ●人権・同和教育における取組が今後も持続的なものになるようにしていく必要がある。 ●コロナ禍で研修の機会が減少したが、積極的にリモート研修に取り組んでいく必要がある。タブレットPCの活用については、教員個々の活用スキルの差が学年間の差につながらないよう日常的な研修を行う必要がある。	教職員アンケート	A	30	60	10	0
		○教職員は健康の保持とワークライフバランスの確立がなされている。 【目標値】 ○教職員の8割以上が肯定		○88%が肯定的な意見で目標を達成している。教職員が声を掛け合いながら、助け合うことができている。また、業務の軽重、優先順位や日々の労働時間を意識して取り組むことができた。 ○新型コロナウイルス感染症対策による特別休暇が設定されたこともあり、有給休暇が取得しやすくなった。 ●小規模校であるため、個々に対する業務の負担は常に大きい。2年目のコロナ禍において、学校での感染対策の徹底により、教職員はかなり疲弊している。そのため、個々が仕事とプライベートを切り離し心と体のリフレッシュを行なえるような職場の雰囲気を作っていく必要がある。	教職員アンケート	A	13	75	13	0
					超過勤務時間 （月45時間）	54.2　時間				
					年次有給休暇が取得しやすい （年5日以上）	1.3　日				
	学校関係者評価委員の所見	○新型コロナウイルス感染症対策について、現状では、どんなに気を付けていても感染するかもしれないという覚悟をしておかなければならいと思う。いざ、感染した場合に慌てず対処できるように気持ちにゆとりを持っておくことも大切だと思う。学校の先生においては、特に、気持ちを張りつめ過ぎないように気を付けてほしい。		学校の対応	○学校が担う役割は増える一方である。コロナ禍を契機として、学校行事の精選を図るとともに、持続可能で地域に開かれたカリキュラムへと改善していきたい。 ●教職員は学校教育を止めないために、新型コロナウイルス感染症対策に公私ともに明け暮れ、疲弊している。そのため、業務の優先順位や軽重をつけるとともに、休日における心と体のリフレッシュを図ることができるよう管理職が積極的に働き掛けていく。					